

ひきこもり傾向児の心理的特徴の解明と支援に関する研究 —文章完成法によるアプローチを中心として—

野村あすか

主論文の要約

近年、わが国においては、様々な要因によって社会参加の場が狭まり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期に渡って失われる青年期の「ひきこもり」が問題となっている。しかし、特に本人が受診や相談への動機づけをもたない場合、支援に困難を伴うため、予防を目的とした児童・思春期からの早期支援も課題となることが指摘されている。本論文では、将来のひきこもりのリスク・ファクターの一つである、子どもの内在化問題としての「ひきこもり (social withdrawal)」に着目し、文章完成法 (Sentence Completion Test: SCT) によるアプローチを中心として、「ひきこもり傾向児」の心理的特徴を解明しその支援について検討することを目的とした。

第1章では、海外における“social withdrawal”に対して、わが国では「引っ込み思案」と「ひきこもり」という二つの訳が充てられており、それぞれの概念に沿った研究が進められてきたという現状があるが、両概念の異同については十分な検討がなされてはいないことを問題として掲げた。その上で、海外における“social withdrawal”，日本における「引っ込み思案」と日本における「ひきこもり」の各概念に関して、①概念の変遷、②測定方法、③心理的特徴、④支援方法といった観点から先行研究の展望を行い、ひきこもり傾向児の研究に関する課題を明らかにした。

第2章では、SCTに関する研究展望を行った。すなわち、海外と日本におけるSCTの歴史をまとめるとともに、小・中学生を対象としたSCTに関する臨床研究および実証的研究を概観し、主に研究の方法論という観点からSCTの研究に関する課題を議論した。

第3章では、本論文における問題の所在と目的を明らかにし、第4章以降で扱う内容についての概略を述べた。なお、本論文における「ひきこもり傾向」は、「仲間から孤立していく行動傾向」と定義した。また、ひきこもり傾向児の抽出には、子どもを対象とした心理学的研究の指標として世界各国で使用されているChild Behavior Checklistの自己評定版である、Youth Self Reportの下位尺度「ひきこもり」を使用することとした。

第4章では、SCTを用いて日本におけるひきこもり傾向児の学校における自己、友人関係、対教師関係および家族関係の心理的特徴を明らかにした。研究1では、一般の小学校4年生、6年生、および中学校2年生計1,087名を対象として検討を行った。学年、感情的側面および内容的側面の3変数間の関連を検討するために、対数線形モデルを用いた分析を行った。その結果、学年と感情的側面の関連については、いずれの領域においても学年が上がるにつれて肯定的なものから否定的・中性的なものへと移行することが明らかになっ

た。学年と内容的側面の関連については、学校場面における自己像に影響を与える領域が学年によって異なることが示された。また、友人関係では、事実を中心とした記述から内面的な記述が増えることが示された。以上より、小・中学生の学校場面における自己像や対人関係の発達的变化について、SCT の記述の一般的傾向が明らかになり、潜在的な問題を抱えた児童生徒の早期発見と支援における SCT の基礎的知見が蓄積されたと考えられた。研究 2 では、自己記入式質問紙により研究 1 のサンプルから抽出したひきこもり傾向群 52 名と対照群の学校における自己像および対人関係の特徴を比較検討した。その結果、ひきこもり傾向児の学校における自己像、友人関係や家族関係については、総じて否定的記述の割合が高いことが明らかになった。また、対教師関係については対照群との顕著な差異は認められなかったが、記述内容からは教師とのかかわりが希薄であることが窺われた。以上より、ひきこもり傾向児は学校や家庭などの場面で困難感を抱えていることが示唆された。

第 5 章では、SCT を用いて、フィンランドとの二国間比較から見た日本のひきこもり傾向児の心理的特徴を検討した。研究 3 では、日本の小学校 4 年生と中学校 2 年生 (8 年生) 計 706 名と、フィンランドの 4 年生と 8 年生計 398 名を対象として、学校における自己像および対人関係の二国間比較を行った。日本の小・中学生には、学校における自己像と友人関係において肯定と否定を問わず感情を伴った内面的記述が多く認められ、学校環境において自己や友人関係を巡る体験が多いことが示唆された。一方で、フィンランドの小・中学生には、対教師関係や家族関係における肯定的記述が多く認められ、その背景には子どもを一個人として尊重する学校環境や社会環境があることが考察された。研究 4 では、研究 3 のサンプルから日本のひきこもり傾向児 23 名とフィンランドのひきこもり傾向児 23 名を抽出し、学校における自己像および対人関係の二国間比較を行った。日本のひきこもり傾向児には、学校におけるいじめ被害、孤立傾向や消極性を示唆する記述が多いことなどが明らかになり、総じて日本のひきこもり傾向児の困難感の方が高いという可能性が示唆された。

第 6 章では、質問紙法、投影法および学校場面における行動観察という多面的アプローチによる事例研究から日本のひきこもり傾向児の心理的特徴を検討し、支援のあり方について考察した。研究 5 では、日本の小学校 4 年生のひきこもり傾向女児 2 名 (事例 A と B) を対象として約 1 年間に渡る縦断的事例研究を行った。事例 A のひきこもり傾向は一貫して高く、事例 B のひきこもり傾向は 5 年生進級後に急激に悪化してから一貫して高かった。2 名の自己像は関係性の中で肯定的なものに変化することもあるが、総じて否定的なものであった。また、友人関係や家族関係における困難がひきこもり傾向そのものに影響を与えていた。一方で対教師関係は比較的良好であり、個々の特徴を踏まえた教師の支援がひきこもり傾向児の適応を向上させる方向にはたらくことも示唆された。研究 6 では、フィンランドのひきこもり傾向女児 3 名 (事例 C, D と E) を対象として事例研究を行った。行動観察は現地調査にて終日実施した。3 名の臨床像はそれぞれ異なっており、それには攻撃的

行動の程度や友人関係が関与していることが示唆された。また、質問紙における自尊感情の低さは日本のひきこもり傾向児と共通していたが、投影法における自己像には肯定的な記述が多く認められた。さらに、3名は総じて教師への信頼感や家族に対する安心感が高かった。

第7章では、各章で得られた知見をまとめ、日本におけるひきこもり傾向児の心理的特徴とその支援に関する総括的討論を行ったうえで、今後の課題を述べた。本論文により、小・中学生のひきこもり傾向という現象の背景は多種多様であることが示されたが、ひきこもり傾向児の中には否定的な自己像を有する者が多いことや、友人、教師や家族との関係に何らかの困難を抱えている者が存在することが明らかになった。これらを踏まえて、臨床心理学的立場からは、ひきこもり傾向児の心理的特徴を詳細に見立てることや、教師と連携しながら支援を行うことの重要性が、教師の立場からは、魅力ある授業を展開すること、ひきこもり傾向児の自尊感情を高めるような役割を与えることや、対人関係上のトラブルが起こった時のフォローアップを行うことなどの重要性が提起された。